

【研究ノート】

北東アジアと古代しまね

豊田 有恒

1. 須佐之男神話と新羅
2. 国引き神話
3. 駕洛国記—『三国遺事 [サムゲンニユサ]』における
首露王 [スロワン] 誕生記事
4. 加羅国の重要性

1. 須佐之男神話と新羅

古代出雲の神話において、もっとも有名な神は、国譲りで有名な大国主命 [おおくにぬしのみこと]、事代主命 [ことしろぬしのみこと] の父子の神々である。だが、大国主、事代主の父子は、高天原から派遣された神々に国を譲ってから隠れ神¹⁾ となり、「氷木 [ひぎ] 高しり、宮柱太しり」と形容される出雲大社に隠遁してしまう。

この二柱の父子神を除けば、須佐之男命 [すさのおのみこと] が、神話上の最大のヒーローであり、日本神話には珍しいトリックスター²⁾ 的な性格を与えられ、スケールの雄大な物語の主として、広く知られている。須佐之男と息子の五十猛 [いたける] は、新羅の曾戸茂梨 [そしもり] にいたと、『日本書紀』の一書の四にあるから、新羅系の渡来神にちがいない。曾戸茂梨とは、韓国語の徐伐 (ソフル) = 都城であると、三品彰英が早くから指摘している。現在のソウルの地名も、これに因るものである。のちの神仏習合によって、須佐之男は、仏法の守護神である牛頭天王 [ごずてんのう] の垂跡 [すいじゃく] だとされ、祇園の八坂神社の祭神とされるようになるのだが、この曾戸茂梨という地名は別な韓国語でも解釈できる。ソとは牛の意味であり、モリとは頭の意味になり、そのものずばり牛頭天王とイコールになるのである。

また、別の一書では、熊成峰 [くまなりのみね] から<根の国>に渡ったとある。<根の国>とは、出雲を指している。『日本書紀』の「雄略天皇紀」には、百済の汶州王 [ムンジュワン] に久麻那利 [くまなり] の地を賜ったとする記事がある。この記事の妥当性はともかく、熊成峰、あるいは熊川などと漢字で表記される地名と、この久麻那利が関係していることは、多くの先達が指摘しているところである。熊 (くま=コム) は、日韓比較言語学の同語源の単語の例として、しばしば引用される。現在の韓国では、漢字の訓読み

を廃止している。かつては訓読みも存在したのだが、時代が下るとともに、漢字の音読みへと移行していった点は、日本語とも共通している³⁾。

久麻那利=熊〔コム〕津〔ナレ〕=熊津〔ウンジン〕に相当する地名が、今も二ヶ所に存在する。ひとつは、熊という漢字を避けて、のちに良い意味の漢字に変えた現在の恩津〔ウンジン〕である。巨大な弥勒菩薩〔ミリュクボサル〕の石像で有名な観光地である恩津には、かつて一時的に百済の王都が置かれたことがあり、七世紀末の占領期には唐の熊津〔ゆうしん〕都督も任命されている。もう一ヶ所は、閑麗水道〔ハルリヨソド〕に面した熊川〔ウンチョン〕である。いずれも古代には、久麻那利〔くまなり〕と呼ばれていたのである。

日本側では、高天原から追放された須佐之男命〔すさのおのみこと〕は、鳥髪山に天降ったとされている。この鳥髪の里は、有名な八咫の大蛇を退治した舞台として知られているのであるが、現在の島根県横田町の船通山〔せんつうざん〕の麓だとされている。ここは、須佐之男命が上流から流れてきた箸を追って逆上ったとされる斐伊川〔ひいかわ〕の源流にあたり、まさに大蛇退治の舞台に当たる。神話の舞台が、今も生きているのである。山上までは、ヴィラ船通山の脇から登山できる。

また、須佐之男命の息子にあたとされる五十猛〔いたける〕に関しては、新羅からもたらした植物の種を紀伊の国で植えたとされているから、一種の文化英雄神のように扱われている。これに由来するのであろう。国道9号線の大田市のあたりには、五十猛〔いそたけ〕と呼ばれる町名が現存し、その名を冠したドライブインもあり、旧地名では磯竹〔いそたけ〕村があった。大田市五十猛町には、韓神新羅〔からかみしらぎ〕神社、五十猛〔いそたけ〕神社などがある。邇摩〔にま〕郡仁摩〔にま〕町の港には、韓島〔からしま〕があり、韓島神社が鎮座している。時代は下るものの、地元の伝承では、五十猛と仁摩の中間地点の大浦に、新羅からやってきた須佐之男命が上陸したという。このあたりは、現在は同じ島根県であるが、古代の国名でいうと、出雲と石見の国境に当たっていた。出雲王朝の実在を想定すれば、渡来系の須佐之男命、五十猛命という父子の勢力が、直接の出雲の領土を避けた理由とも考えられるにちがいない。韓神新羅神社の社伝にも、同様の記述がある。もとより後世のものであり、いささか信憑性には欠けるわけであるが、一抹の真実が化石化したかたちで残っていた可能性も排除できない。なんらかの関係があるにちがいない。

ただ、この須佐之男命〔すさのおのみこと〕に相当する神話上の存在は、朝鮮側の文献にはまったく見いだせない。なぜなら、朝鮮の宗教関係の伝承は、高麗朝が仏教にのめり込んで滅亡したあと、朝鮮王朝となり、儒教を国教と定めたことによって、いわゆる「怪力乱神」の類として退けられてしまったため、基層(substratum)から根絶されたからである。

古代新羅は、天孫降臨の始祖伝説を持つ三つの氏族による王位鼎立〔ていりつ〕を原則としていた。『三国史記』によれば、朴〔パク〕、昔〔ソク〕、金〔キム〕の天降三姓〔チョンガンサムソン〕と呼ばれる氏族から、まわりもちで王を鼎立させていたようである。だが、四世紀、『史記』の紀年どおりとすれば西暦三百七十一年、奈勿王〔ナホルワン〕の

治世以降、王権は金氏に独占されるようになった。そのため、他の二姓の人々が、金王朝のもとで、住みにくい境遇に置かれたことは、想像に難くない。新羅から、多くの人々が渡来した背景には、王権の交代占有という事情があったのである。渡来人は、かつてマルクス主義史学者が主張したように、日本の半島領有によって、哀れな捕虜として連行されたわけではない。

かれらは、政争に破れた結果、一族郎党を引き連れて、新天地をめざして渡来したのである。古代の日本列島は、かれら渡来人にとっても、魅力あるフロンティアであったのである。こうした事情は、朴王家の末裔と考えられる弓月君〔ゆづきのきみ〕が渡来した際には、百二十県の住民を率いていたと『日本書紀』に記されていることからもしっかりする。決して尾羽打ち枯れした亡命者などでないことは明らかである。まして、日本が歴史の黎明期に朝鮮半島を領有し、戦時捕虜として帰化人を連行したなどという虚構は、かつてはマルクス主義史学者による定説として君臨していたものの、現在では砂上の楼閣と化している。

このような新羅系の渡來說話は、天日槍〔あめのひぼこ〕、都怒我阿羅斯等〔つぬがあらしと〕などのエピソードとして『記紀』に記されている。特に天日槍の伝説は、丹後から中国地方一帯にかけて広く分布している。神話の上の話にしろ、「八千軍〔やちぐさ〕」を率いていたというから、相当な勢力であったことは疑いない。金錫亨〔キムソクヒャン〕は、これら勢力が、そのまま半島の意を受けていたわけではなく、日本国内に新羅、百濟など諸国の分国があったとする「分国論」⁴⁾を主張し、戦後の古代史研究に一石を投じた。金の説の当否はともかく、須佐之男も、こうした伝承上の人物と、関わりがあるはずである。エウヘメリズム⁵⁾の解釈からすれば、これら英雄や神々は、実在の人物を反映していることになる。

2. 国引き神話

また、国譲りの神話と双璧をなす国引きの神話も、新羅との文脈で語られている。この神話が『記紀』には記録されていない点も、なにかの史実を示唆するものと言えよう。国引きの神話は、『出雲風土記』にのみ登場する。風土記は、聖武天皇の治世に撰述を命じ、各国で編集されたものと考えられるが、実際には『上毛野風土記』のように、他の文献に引用された佚文（いつぶん）すら現存せず、なにかの事情で初めから編纂されなかったか、あるいは編纂されはしたものの大和朝廷の権威に抵触する部分があり破棄されたか、と解釈されるケースもある。現在、常陸、播磨、豊後、肥前などの風土記も、おおよそ残っているが、完本として現存するのは、『出雲風土記』だけにすぎない。

国引きの神話を、『出雲風土記』から、現代語訳してみよう。

「国引きをなさった八束水臣津野命〔やつかみずのおみつのみこと〕が言われるには、
『八雲たつ出雲の国は、出来たばかりの若い国である。はじめて作った国ゆえ、小さ

く作りすぎてしまった。そこで、よその土地を縫いあわせて大きくするとしよう。』

『白いパジャマのように見える志羅紀〔しらぎ〕の国の岬のほうに、余った土地がないものかと思渡したところ、やっぱり余った土地があった』と仰り、乙女の胸ほどの幅広の鋤をとって、魚の鰓に矛を突き刺すようにして土地を突き刺し、ススキの穂を振り分けるようにして土地を切り取り、この土地に三つ編みにしたロープをかけて、霜に当たった葛〔かづら〕の綱を引っ張るように、ゆっくりゆっくりと川船をたぐるように、『国来〔くにこ〕国来』と引き寄せて、縫い合わせた土地が、去豆〔こず〕の折絶〔おりたえ〕から八穂爾支豆支〔やほにきづき〕の岬にいたる土地となったのである。去豆〔こず〕の折絶〔おりたえ〕とは、現在の小津の浜のことである。また八穂爾支豆支〔やほにきづき〕の岬とは、現在の日の御崎を指している。海外から土地を引き寄せてきて領土を拡大したというのだから、なんとも気宇壮大な神話だが、もちろん、こんなことが現実に可能であるはずがない。おそらく、多くの新羅系の人々が渡来したという史実を反映したものなのであろう。国引きの対象となる土地は、ここに引用した新羅ばかりではない。越〔こし〕の国からも、一部を引き寄せたとある。日本海をはさんだ対岸の新羅ばかりでなく、北陸一帯と出雲とのあいだに、いわゆる環日本海文化圏という交流ルートが実在したことの証左であろう。

現在の日御崎〔ひのみさき〕神社の境内に、ひとつの摂社がある。韓国〔からくに〕神社である。祭神は素盞鳴尊〔すさのおのみこと〕、五十猛命〔いたけるのみこと〕とある。素盞鳴尊とは、漢字による表記は異なるものの、須佐之男のことである。

3. 駕洛国記—『三国遺事〔サムグンニユサ〕』における首露王〔スロワン〕誕生記事

かならずしも出雲に限らず、古代日本と朝鮮半島との関わりを示す重要なキーワードに、韓国〔からくに〕がある。韓国の韓の字を、和訓では<から>と読んでいる。のちに遣唐使によって、多くの中国文化が直接に招来されるようになると、<から>は中国の謂になってしまうのだが、もともとは朝鮮半島の古代国家の名である。『魏志東夷伝』は倭人に関する記述ばかりでなく韓についても記載しているが、そこには朝鮮半島の国家の変遷が詳述されている。朝鮮南部は、馬韓、辰韓、弁韓という三つの地域に分かれていた。このうち五十四国と言われる村落共同体(Bauerngemeinwesen)であった馬韓は百済に、また十二国に分かれていた辰韓は新羅へと統一されていくのだが、弁韓は加羅〔から〕という連盟⁶⁾にまでは発展するのだが、確固たる統一国家には至らなかったらしい。

『三国遺事〔サムグンニユサ〕』には、駕洛(=加羅、加耶)国の始祖伝説が記録されている。口語訳してみるとしよう。

「天地がひらけたのちも、この土地には国号もなく、君臣の別もなかった。そのころ九干という首長があつて、百姓を治めていた。人口七万五千人の多くは、井戸を掘って水を飲んだり田を耕して食らったりして、自分たちの都を持っていなかった。

後漢の光武帝の建武十八年（西暦四十二年）、北亀旨〔きじ〕山に、世の常でない気が満ちた。禊浴〔みそぎ〕のため集まっていると、天から声が降ってきた。そこに人がいるのかと訊くので、いると答えたところ、ここは何というところかと尋ねてきた。亀旨というところだと答えると、また声が聞こえた。

『皇天が我に命じたところでは、この土地を御し、家と邦を維新⁷⁾し、君后になるようにとのことである。そのため降ろうとしているのだ。汝らは、すべからく峯の頂上を掘って、土を取るべし。さらに、<亀よ、亀よ。首を出せ。出さぬと、燐灼〔ひあぶり〕にして、喫〔く〕ってしまうぞ>という歌をうたい、舞い踊るがよい。これ、すなわち、大王を迎えるためじゃ』。「九千たちは言われたとおりにし、喜んで舞い踊った。いくらかたたないうちに、天を仰ぎみると、ただ紫の縄があるばかりで、その先は天から垂れて地についていた。縄の下をたずねてみると、紅の布につつまれた黄金の箱があり、中には黄金の卵が六個はいつていた。持ちかえって、九千の一人である我刀干〔アトハン〕の家の褥〔しとね〕のうえに安置し、その日は一同かえって、翌朝あけてみると、六つの卵は六人の童子と化していた。はなはだ立派な顔をした童子たちであったので、人々は拝んだりして、たいそう鄭重に扱った。

童子たちは、日々に大きくなり、十日ほどたつと身の丈九尺に達した。龍のような異相をしていたので、その月のうちに即位した。名を首露〔スロ〕といい、国を大駕洛〔テーカーラ〕といい、また加耶〔カヤ〕とも称した。六加耶のひとつであり、他の五人もそれぞれ五加耶の主となった」

日本神話にも登場する天孫降臨というモチーフが、ここに見られる。戦前、日本の半島統治では、天孫族という選民思想が、大々的に喧伝されたのであるが、天孫降臨というモチーフは、有名な檀君〔タンゲン〕神話をはじめとして、もともと朝鮮半島のほうが遙かに多いのである。朝鮮の古老が、日本統治下で、児童たちに、こちらのほうが天孫族の本家だと、密かに教えていたという話を、個人的に耳にしたことがある。

日本神話の場合、ニギノミコトが降臨した際、真床小襖〔まどこおぶすま〕にくるまれていたとされている。このパターンは、『三国遺事』の『駕洛国記』に見られる卵というモチーフの変形だとされる。卵生説話というのは、東南アジア全域に見られるモチーフである。

上田正昭は、日本神話では天孫の側からの記述がなされているが、韓国の神話では天孫を迎える側から記述されていると分析している。けだし卓見であろう。

ただ、ここで注目すべき点は、神話学的な分析ではない。加羅国の始祖伝説である。前述した首露王が、それであるが、後世にいたるまで、注目される存在なのである。現在の大韓民国において、最大の氏姓は、八百万という数を誇る金海金氏〔キメキムシ〕と言われる氏族であるが、その祖として、伝説の首露王の名が、今も信奉されているのである。韓国において、血族集団による縁故採用（nepotism）が多い秘密は、このあたりから始まるらしい。

4. 加羅国の重要性

また、日本列島への大陸文化の窓口として、加耶〔カヤ〕国の存在は、のちのちまでも重要な意味を持つことになる。加耶は、加羅とも表記される。朝鮮語の音韻法則では、Rの子音は極めて弱いものであり、しばしばYという子音に転訛するのである。

加羅……『三国遺事』の表記に従えば、駕洛国は、しばしば日本史で言われる任那〔みまな〕という地域と重なる。

任那日本府⁸⁾は、『日本書紀』に登場する。戦前の皇国史観の時代、日本による朝鮮半島領有の根拠として、しばしば悪用された歴史を持っているため、任那あるいは加羅についての公平な学問研究は、なかなか進まなかった。ここが学問の恐ろしいところである。金沢庄三郎は、有名な『日鮮同祖論』を著し、日韓併合の学問的な根拠(?)とされた。このため、金沢は、戦後は不当な評価をこうむるのであるが、もともとは言語学的な著述であり、それ自体は単なる学説にすぎない。エンリコ・フェルミ、ラザフォードの両博士による核分裂理論が、のちに核兵器の開発に悪用されることになったが、当の両博士は、純粋に物質の究極的な探究に勤しんだだけである。ここが学問の恐ろしいところである。

このような事情もあって、加羅、任那に関しては、多くの研究者が避けて通っていたというのが実情である。また、韓国においても、戦前の日本を想起させる任那あるいは加羅に関しては、ほとんど研究に手を付けかねている状況が続いていた。韓国では、親日というレッテルを貼られることは、学者的生命の終わりを意味していたからである。

だが、加羅国の重要性が、しだいに高まってきた。考古学的にも、加羅国の版図は、これまで想像されていた以上の地域に及ぶということが、明らかになってきた。たとえば、戦前から知られている梁山〔ヤンサン〕古墳群の夫婦塚〔めおとづか=プブチョン〕は、高速道路の梁山インターチェンジが、古都慶州〔キョンジュ〕の隣に位置していることなどから、新羅文化というふうにあっさり片づけられていたのだが、今や加羅文化圏に分類されている。また、高霊〔コリョン〕は、八万大乘経〔パルマンテジャンギョン〕という世界最古の印刷物を所蔵する海印寺〔ヘインサ〕で有名であるが、池山洞〔チサンドン〕古墳群が、やはり加羅文化の産物であると認められるに至った。文献に現れる大加耶〔テガヤ〕に相当する。また、昌寧〔チャンニョン〕の校洞〔キョドン〕古墳群なども、加羅文化圏に属している。池山洞や校洞の古墳群を見学するにつれて、加羅文化圏の重要性が肌で実感できた。

さらに釜山〔プサン〕市の温泉で有名な東萊〔トンネ〕地区の福泉洞〔ポクチョンドン〕古墳が、東亜大学校〔トンアテハクキョ〕によって発掘された際、見学してみたのだが、考古学の素人の目で見ても、新羅とは明らかに様式が異なる。さらに、これは未見であるが、金海国際空港に近い大成洞〔テソンドン〕古墳など、加羅国のものと思われる遺跡が、あいついで発掘されたことから、あらためて加羅国の重要性が、認識されるようになった。

<カラ>は、日本古代史の門戸であったのだが、単なる固有名詞ではなく、やがては外国を意味する普通名詞化していく。のちに中華王朝が、日本人の視野に入ってくるようになると、<カラ>の意味が、変貌していくのである。仏教伝来のとき、仏は「大唐〔おおから〕の神」と呼ばれている。つまり、いつのまにか<カラ>は、中国の謂になってしまうのである。

加羅は、韓〔から〕とも表記される。奈良の大仏で有名な東大寺の境内には韓国〔からくに〕神社がある。日本文化の中枢にまで、加羅が浸透しているのである。また、九州の韓国岳〔からくにだけ〕も、よく知られている。だが、のちに日本人が、遣唐使などの経験を通じて、中国を意識するようになると、しだいに本来の朝鮮半島からの渡来文化を忘れるようになる。いや、意識的に、朝鮮半島からの文化的な影響を低く考えたがるようになるというべきかもしれない。幻の<カラ>国は、しだいに作為的に消し去られるようになる。なかには、辛国〔からくに〕という漢字表記に変えられているところさえ存在する。また、瀬田の唐橋、唐金、唐物など、中国の唐王朝から渡来したかのように作為的に変えられている例すらある。本来は韓橋、韓金、韓物とでも、表記すべきなのである。こうした日本人の変化を示す最たるものが、佐賀県の唐津⁹⁾市であろう。もともと中国とは関係のない場所である。文字通り、いや発音通り、ここは、韓国から対岸にあたり、韓津〔からつ〕だったのである。

文献的には、痕跡的にしか残存していないが、例を上げることは不可能ではない。朝鮮の意富加羅〔おほから〕国の王子である都怒我阿羅斯等〔つのがあらしと〕は、北陸から出雲を経由して長門の国へ至ったとされている。意富加羅とは、大加羅〔おおから〕つまり大加耶〔テーガヤ〕と『三国遺事』に表記されている地名に他ならない。加羅国と出雲との交流を示す傍証とはなりうるはずである。また、須佐之男命〔すさのおのみこと〕が、八俣の大蛇を退治した際に使用した剣は、「蛇韓鋤之劍〔おろちのからさひのつるぎ〕」と呼ばれているのである。朝鮮語で「サビ (sab)」が、鋤の意味であることは、金錫享（前出 脚注参照）が、つとに指摘しているところである。大蛇の腹を探っているうちに、この「蛇韓鋤之劍」が折れて、「天叢雲劍〔あめのむらくものつるぎ〕」が現れたとする物語には、朝鮮半島の影響下にあった原〔げん〕出雲が、大和の勢力下に入った歴史を反映するものかも知れない。この剣が、皇室の皇位継承権を示すレガリア (regalia) として、「天叢雲劍〔あめのむらくものつるぎ〕」あるいは、「草薙劍〔くさなぎのつるぎ〕」と呼ばれるようになるのは、遙か後のことである。

その韓〔から〕に関する地名が、日本でもっとも多く残っている地方が、島根県なのである。須佐之男命〔すさのおのみこと〕神話の重要性が揺らぐわけではないにしても、単に新羅関連の伝承ばかりでなく、古代加羅国と出雲の関係も、無視できないものであることが分明になっている。

日韓両国のあいだには、さらに巨大な交流の歴史があったにちがいない。だが、それ

らの交流は、はじめから文字として記録されなかったため、著しく歪曲されたかたちで、神話伝承のなかに痕跡を留めているにすぎない。今日、われわれは神話 (mythos=ミュートス) を論じる (legein=レゲイン) ことによって、古代を知るわけであるが、神話学 (mythology) が成立する以前から、プラトンの言うように、<ミュートロギア> (mythologia) とは、もともと神話を物語ること自体を意味していたのである¹⁰⁾。

歴史的にみて、日韓交流は、平和的なものであったとはかぎらない。天日槍〔あめのひぼこ〕伝説でも判るように、朝鮮半島からの渡来人によって、征服が行なわれたこともあったにちがいない。さらに敷衍すれば、崇神天皇、応神天皇、継体天皇などを、朝鮮半島から渡来した征服者と考え、これまで万世一系とされてきた王朝が何度も断絶したとする、征服王朝の存在を想定する学説も少なくない。また、最近のトピックでは、百済系の渡来人である高野の新笠〔にいがさ〕が、桓武天皇の母であった史実に、今上天皇が言及されたことは、韓国では大きなニュースとして扱われている。

また、須佐之男伝承が示すような新羅との関わりばかりでなく、朝鮮半島の他の国々との関わりも、無視できないものがある。

現在の出雲地方に残る地名を検証してみよう。

出雲には、圧倒的に韓の字の付く地名が多い。だが、それが、新羅を意味するのか、加羅国を意味するのか、あるいは広義に解釈して朝鮮半島の三国の謂であるのか、今となっては学問的に検証する方法がない。

ここに『延喜式〔えんぎしき〕』という文献がある。成立したのは、平安時代の延長五年(西暦927年)のことで、テキスト・クリティークの立場からすれば、同時代性に欠けることになり、『記紀』や『風土記』よりは、信憑性に乏しいと見なければならぬ。この『延喜式』には、「神名帳」という記録がある。日本の神社の起源などを説明する際に、式内社と書いてあるのは、この『延喜式神名帳』に記載されている神社だという意味である。式内社は、神社の由緒が古いという証拠として扱われるのである。

『延喜式』によれば、出雲には、六ヶ所に「韓国伊太氏〔からくにいたて〕神社」という社が、記載されている。だが、これら「韓国伊太氏神社」は、肝心の『出雲風土記』には記載されていない。そのため、これらの神社の性格に関して、多くの異なる解釈が存在する。韓国〔からくに〕は、これまで論述してきたように、加羅あるいは広義の朝鮮諸国の謂である。問題は、「伊太氏」の部分である。これには、須佐之男命〔すさのおのみこと〕伝承が、からんでいと見る説が少なくない。神社の祭神というものは、時代とともに変遷するケースが多々あり、必ずしも信用できないのであるが、「韓国伊太氏神社」の祭神は、須佐之男命、五十猛命〔いたけるのみこと〕という父子神であるケースが、ほとんどを占めている。

「伊太氏」とは、五十猛〔いたける〕という言葉が、訛ったのだとする解釈は、多くの論者によって支持されている。五十猛は、地名などでは「いそたけ」あるいは「いそたける」

と訓読されているケースもある。五十建〔いそたて〕という表記もある。古代地名研究で有名な谷川健一、加藤義成などの研究者は、この立場を取っている。

これに対して、瀧音能之は、「伊太氏」を射楯と解釈する。新羅との関係が悪化していることから、対新羅の国防上から設置されたものだとするのである。新羅撃退を祈念するための新設の神社であるとするわけである。確かに、新羅末期の状態のなかで、国際情勢は緊迫していた。一例を上げれば、寛平六年（894年）、新羅の船四十五隻が、対馬に来寇した。これに対して、文室善友は、敵の大將三名、副將十一名、士卒288人を殺し、新羅を撃破したとある。いわば戦争状態であった。瀧音の主張には、うなづける点が少ない。確かに卓見であろう。『風土記』に記述のない「韓国伊太氏神社」が、『延喜式神名帳』になって初めて登場する理由の説明としては、充分条件を満たしているとは言えよう。

だが、瀧音説を認めるにやぶさかではないが、いくつかの疑問が残ることも事実である。上田正昭は、相殿神あるいは客神として、「韓国伊太氏神社」が祭られていることに注目した。「韓国伊太氏神社」は、対新羅の射楯〔いたて〕として、新設されたわけではない。たいていは既存の神社のなかに合わせ祭られているのである。例えば玉造温泉にある玉作湯神社のケースでは、あくまで祭神は、出雲のパンテオン（Pantheon）に属する大名持〔おのおなもち〕神、少毘古那〔すくなひこな〕神、櫛明玉〔くしあかるたま〕神となっている。由緒書には、「同社に坐す韓国伊太氏神社（五十猛神）」となっている。「韓国伊太氏神」は、いわば居候状態なのである。まさに上田の言うとおりの、客神の扱いになっている。

また、すでに漢文の訓読が定着しているはずの十世紀において、わざわざ「伊太氏」というふうに万葉仮名風に表記するものだろうか？ もし対新羅の戦勝祈願のためであるなら、そのまま射楯というふうに表記するはずである。さもないと、なんの為のローガンなのか、領民や兵士には通じにくい。

やはり、ここは、旧来の解釈に落ちつくのではないだろうか？ かつての出雲王朝との関わりで、朝鮮半島系の神々が、出雲地方の各地に残っていた。それらの神々は、時代が下るとともに、本来の由緒すら忘れられかけていたと、解釈すべきであろう。

出雲王家の王名には、韓日狭〔からひさ〕という人物もいる。文字通り、韓日〔かんにち〕の狭〔はざま〕という意味で、おそらくは新羅人との混血児であろう。『日本書紀』には、他に韓子〔からこ〕という用例があり、日韓混血児の意味としている。

朝鮮半島との関係は、明らかに古代出雲にとって、きわめて重要なファクターであった。しばしば古代出雲を論じる際に、定説として君臨してきた学説には、幻の出雲王朝という文脈がある。古代の出雲は、大和朝廷との対比のうえにおいてのみ、つまり神話上においてのみ、対置概念として存在したとするのである。『記紀』において、出雲に関しては、他の国々と比べると、膨大とも呼べるほどの分量の記述が、なされている。あたかも、大和朝廷に拮抗するほどの一大勢力であったのごとく扱われているのである。だが、実際の出雲には、王朝と呼べる規模の権力構造は存在しなかった、と解釈するわけである。大和

を陽の世界の存在とすれば、出雲が陰の世界の存在である根の国とする記述に、このような古代のイデオロギーが現れている。実在の大和に対して、出雲は、常に虚の存在であるというふうに、描かれていたのである。つまり、大和をユークリッド空間とすれば、出雲はリーマン的な、あるいはトハチェフスキー的な虚の空間としてのみ、文献に登場していたにすぎないとされていたのである。

これまで実際、出雲には、考古学的にみても、多くのマイナスのファクターがあった。例えば、邪馬台国論において、関連する国々のうち、投馬国〔とうまこく〕を出雲に比定する説は、常に否定されつづけてきた。あの出雲に、戸数五万の大国などあったはずがない。出雲からは住居址が発見されていない。また、神話上の物語としてしか、文献に現れないなど、出雲は、物証を欠いているというのである。こうした観点から、幻の出雲王朝という解釈が、学界の定説化していたわけである。

だが、二十世紀の最後の四半世紀、古代史の世界には、<出雲>という名の妖怪が徘徊することになった。1984年、斐川町の荒神谷遺跡における三百五十八本の銅剣の発見は、学界を驚かせた。この発見には、そのうえ銅鐸六個、銅矛十六本というおまけが加わっている。さらに、1996年には、加茂町の岩倉遺跡において、三十九個の銅鐸が、一度に出土したのである。これほど大量に銅鐸が見つかった例は、これまでなかった。いままで誰も疑義をさしはさまなかった大和銅鐸文化圏なるパラダイム¹⁰⁾が、音をたてて崩壊した歴史的な瞬間なのである。肝心の大和(奈良県)では、銅鐸の大量出土はなく、滋賀県の大岩山遺跡の二十四個、兵庫県桜ヶ丘遺跡の十四個など、近畿圏におけるレコード全てを塗りかえる結果になった。大発見は、これだけにとどまらなかった。2000年、平安時代の出雲大社の旧社殿のものと思われる巨大な柱が、発見されたのである。文献に現れるように、三本まとめて使用したものらしい真の御柱〔みはしら〕が現実のものとなり、十六丈(48メートル)の高層建築の全貌が、マスコミを賑わせたのである。

また、松江市の田和山遺跡では、市民病院の移転先として工事を行っていた際に、小高い丘の上に、九本の柱跡が発見され、環濠がめぐらされていることが、確認されるに至った。遺跡保存運動に参加したのは、七十年代の静岡県伊場遺跡以来のことであるが、コーディネーターとして働いた松江の市民集会には、熱気が満ち溢れていた。この遺跡の概要を、簡単に説明するのは難しいのだが、住居址を伴わないらしいので、山上の祭祀遺跡という解釈が有力になった。九本の柱を漢字の田の字状にした建物とえば、出雲大社の社殿との類似が、俄に話題となった。しかも、松江市と大社町との中間に位置する斐川町の杉沢Ⅲ遺跡において、同様の遺構が山上で発見されるに及んで、想像のふくらむ余地が生じてきた。

弥生時代に、松江近郊で芽生えた祭祀建築が、権力構造が西へ移るとともに斐川町の杉沢Ⅲ遺跡を経て西遷していき、やがて規模が巨大化して、出雲大社の本殿建築として結実したと想像することも、あながち当たらずとも遠からずということになる。

田和山遺跡の出土品のなかには、貴重なミッシング・リンクと考えられるものも、数多く含まれていた。一例を上げれば、石の硯〔すずり〕の破片と思われるものが、見つかっているのである。同様の石硯〔せっけん〕が、北朝鮮の平壤〔ピョンヤン〕において発見されている。前漢の武帝は、紀元前108年、四郡を設置した。楽浪〔ナンナン〕、真番〔チンボン〕、玄菟〔ヒョント〕、臨屯〔イムトン〕の四郡であるが、その郡衙の所在地に関して、定説が確認されている場所は、楽浪郡だけであり、今日の平壤にあたる。

前漢王朝の朝鮮統治の出先機関である楽浪郡衙は、先進中国文化を朝鮮半島に伝える門戸となっていた。それら文化が加羅、新羅などを經由して日本に伝播したと、しばしば解釈される。この場合の〈經由〉という表現には、引っ掛かるものを禁じえない。漢文化は、いったん朝鮮諸国において咀嚼され、消化しやすいかたちで、日本へ伝えられたのであろう。日本語と韓国語は、文法が同じであるから、おたがい通じやすいのである。単に〈經由〉しただけでないことに留意する必要がある。

田和山の石硯は、北東アジア的な、言い換えれば環日本海的な文化の伝播ルートを示唆するものである。古代しまねに、幻の王朝が実在したかどうかという矮小な議論は、もはや意味をなさない。古代出雲が、邪馬台国論争における投馬国であったかどうかという説の当否には、ここでは踏み込まない。だが、戸数五万かどうかはともかく、ある規模の文化圏の存在を前提としないかぎり説明のつかない、数々の出土品を輩出した多くの重要な遺跡が、あいついで白日のもとに曝〔さら〕されているのが現状である。

古代しまねにおける住居址の乏しさにも、ある種の説明が可能になっている。出雲市の正蓮寺〔しょうれんじ〕遺跡では、県道の工事中に巨大な環濠集落の存在が確認されている。直径350メートル以上という。今後、同様の規模の住居址遺跡が発見される可能性が少なくない。住居址が見つからなかったのは、これまで発掘されていなかっただけにすぎないという解釈も成り立つであろう。また、もっと大きなスケールで、鳥取県の妻木晩田〔むきばんだ〕遺跡の巨大な弥生集落から、弥生人の脳が発見されて話題となった青寺地遺跡、松江市の田和山遺跡にかけて、巨大な山陰弥生王国の実在を提唱する意見すら現れている。

考古学的な知見は、画期的なパラダイム転換の時期にさしかかっている。その動きは、すでに出雲を起点として、おおきなうねりになりはじめているのである。

注

- 1) 隠れ神。神話学の上では、我が国の大国主命と同様の存在がたくさんある。ミルチア・エリアーデ (Mircea Eliade) は、隠れた神 (deus otiosus) として言及し、南米のティエラ・デル・フィエゴのセルクナム族の伝承における「空にまします方」という最高神などの例をあげている。
- 2) e.g. 日光。普陀落〔ふだらく〕信仰は、古代インドのポータラカ (仏典では普陀落と音訳される) を意味していたのだが、漢字表記では、二荒〔ふたら〕という文字を用いていた。だが、時

代が下るとともに、次第に(にこう)というふうに通読されるようになった。しかも、聖地の地名としては、荒いという用字が相応しくないで、日光という文字に改められたのである。コムナレ～熊津～恩津という変遷も同様である。

- 3) トリックスター。ユング (Karl Gustav Jung) は、パウル・ラーディン博士の北米ウイネバゴ族の神話研究を引用し、トリックスターを「英雄神話の発達における最初の未発達の段階。英雄は本能的で、抑制がきかず、しばしば子どもっぽい」と説明している。
- 4) 分国論。金錫享 [キムソクヒャン]「古代朝日関係史——大和政権と任那——」(翻訳日本題)。原著『初期朝日関係研究 [초기조일관계연구]』(朝鮮民主主義人民共和国科学院出版社1966)
- 5) エウヘメリズム。euhemerism. 紀元前三百年ころ、小アジアの人 Euhemerus が唱えた説。神話の神々は人間英雄を神化したものであるとする。
- 6) 加耶連盟 [カヤヨンメン]。李基白 [イキベク]『韓国史新論』による。
- 7) 維新。一九七〇年代、大韓民国の朴正熙 [パクチョンヒ] 大統領は、維新体制 [ユシンチェジェ] を敷いた。これに対して、日本では、左翼知識人を中心として、日本の明治維新を気取った反動だとする解釈が一般的であった。これは、日本人の奢りに基づく勝手な解釈であり、事實は明治維新とは関係なく、朝鮮の『三国遺事』の『駕洛 [から] 国記』における「家邦を維新し」という記述を出典としている。
- 8) 任那 [みまな] 日本府。『日本書紀』(朝日新聞社刊) では、武田佑吉校注として、歴史の黎明期からの日本による南鮮支配説の立場から、日本府を総督府と定義している。戦前の皇国史観によるこの手の学説は、戦後そのままマルクス主義史学者によって、踏襲されるのである。
- 9) 唐津。日本人は、とかく遣唐使の役割を高く評価しがちなのである。およそ三十回ほど計画されたが、実現した遣唐使は十四回にすぎない。難破する危険をおかしてまで、自らの努力によって中国文化をもたらしたと考えたがるのは、日本人の自民族中心主義 (Ethnocentrism) であろう。遣唐使だけで、中国文化をすべて招来できたとは考えにくい。それ以前に、朝鮮半島から多くの渡来人がやってきて、かの地において咀嚼されたかたちで、先進文化を伝えた土壌があったからこそ、遣唐使のもたらした最新の文化が、日本に根づいたのである。
- 10) Karl Kerényi (カール ケレーニー)、*DIE RELIGION DER GRIECHEN UND ROMER*『ギリシア、ローマの宗教』(邦訳『神話と古代宗教』) による。
- 11) パラダイム。トマス・クーン (Thomas S. Kuhn) のパラダイム (Paradigm) 理論。“The Structure of Scientific Revolution” による。

キーワード 大国主命、事代主命 須佐之男命 [すさのおのみこと] エウヘメリズム
新羅 任那 [みまな] 加羅 出雲風土記 根の国 遣唐使

(Aritsune TOYOTA)